

最後にひとつだけお願いしてもよろしいでしょうか？

テレネッツァ

スカレットの婚約者だった第二王子カイルをそのかし、婚約破棄させた張本人。その罪を問われ王都から追放されたが、なぜか魔大陸で再会することになった。

ジュリアス

パリスタン王国の第一王子。優秀だが、スカレットをからかって遊ぶのが大好きな腹黒い性格。

スカレット

冷たくも美しい容姿から『氷の薔薇』と称されるヴァンディミオン公爵家の令嬢。第二王子との婚約破棄をきっかけに悪徳貴族たちを拳で成敗した。

グラハール

かつてのスカレットの家庭教師。ヴァンキッシュ帝国での再会を経て、魔大陸でその正体が明らかに？

エクセル

救世の勇者こと、リンドブルグの勇者パーティーの一人。仲間たちには『田中くん』と呼ばれることもあるようだ？

ダンテロード

スカレットに魔眼を授けた魔王。強大な魔力を持つようだ？

登場人物紹介

第一章 貴女の願いを叶えましょう

――悪魔。

あらゆるものが神によつて創造されたこの世界で、唯一。

生ある者の“こんな存在がいてほしい”という願望によつて生み出された存在。

人智を超越した力を持ち限りなく人間に近い容姿をしたそれは、神にも匹敵するといわれている強大な魔力をもつて、自らを呼び出した者が欲するあらゆる願いを叶えるという。

ただし悪魔は願いを叶えることと引き換えに、対価を要求する。

それは願いを叶えたい者にとつてかけがえのない、最も大切な存在。

あるいは家族。あるいは恋人。あるいは無二の親友の魂である。

故に代償を払った者やその周りの者達は、願いが叶った喜びも束の間。

失った物の尊さに後悔し、絶望し、涙を流す。

そして彼らは自分達にそんな対価を払わせた、角と翼を持つ邪悪なる者に対して。

憎悪の念を込めてこう叫ぶのだ。

――この“悪魔”め、と。

すべてが黒に塗りつぶされた無限の闇が広がる虚無の世界。

その中で一人、赤子のように目を閉じて微睡まどろんでいると、どこからか私を呼ぶ声が聞こえてきた。それが悪魔を召喚しょうかんする呪文だと認識した瞬間、私の身体は光の粒子となって別の世界へと転送される。

それからどれくらいの時が経ったのか。次に目を開けた時、私は薄暗い部屋の中にいた。

どこかの屋敷の中だろうか。密閉された部屋の壁には燭台しよくだいが掛かっていて、部屋にわずかばかりの明かりを灯していた。足元の床には悪魔を呼び出すための魔法陣。

そして眼前には、尻もちをついて呆然とした表情で私を見上げる、銀髪の少女の姿があった。

年の頃は五歳程。薄手の寝間着のような白い服を着ている。

そんな彼女は青い瞳を大きく見開き、瞬き一つせずに食い入るように私を見ていた。

「——人間の娘よ。私を呼び出したのは貴女ですね？」

私と初めて邂逅かいこうした人間の反応は決まっている。

漆黒しつこくの宮廷衣装を纏い、人間族と似た容姿を持ちながら、頭から生える二本の禍々しい角と、背から伸びた一对の漆黒の翼。そして強大な魔力を纏う私を目の当たりにした時。

大抵の者は恐れを抱き震えあがるものだが——

「本当に来てくれた……」

少女はそうつぶやくと、ふらふらと頼りない様子でゆっくりと立ち上がった。

やせ細り青白い顔をした彼女は、身体をわずかに震わせながら荒い息を整えるように大きく深呼吸をする。

病か、それとも少女が置かれている環境によるものか。どちらにしろ、この様子ではそう遠くない内に彼女は死を迎えるだろう。一目でそう分かるほどに、目の前の少女は衰弱していた。

願いを聞かずともこのような人間が願うことは分かる。

病や衰えとは無縁な、決して枯れることのない不滅の身体を手に入れることだ。

「貴女の願いを叶えましょう。ただし相応の対価を頂きます」

少女の足元に跪き、目線を合わせながらそう告げた。

彼女は私から視線を逸らすように俯くと、身体の震えを止めて大きく息を吸い込む。

「……？」

少女の不可解な行動に私が眉をひそめた次の瞬間。

勢いよく顔を上げた彼女は満面の笑みでこう叫んだ。

「あのね悪魔さん！ 私一度で良いから思いつき——ぶつはあ——！」

笑顔のまま少女が口から吹き出した大量の血が、私の顔面に容赦なく降り注いでくる。

「……」

顔面が血まみれになった私の前で、彼女は笑顔のまま仰向けに地面に倒れていった。

そしてそのまま死んだように動かなくなる。

「逝った、のか……？」

耳を澄ませて心臓の鼓動を確かめると、弱々しくはあるが確かに動いている。どうやら気絶しただけのようだ。

「……なんなのだこの娘は」

少女が意識を取り戻した後、聞けずじまいだった願いとは何かを尋ねた。

彼女は言った。お家のお庭を走り回れるぐらい元気な身体になりたいと。

それは悪魔に乞うにしている随分と控えめな願いではあったが、大方予想通りのものだった。

少女がどのような理由で衰弱しているかは分からないが、たとえそれが人間族の力では決して治すことができない不治の病だったとしても、悪魔の力をもってすれば治癒することなどたやすい。

呼び出された時は少女の様子に多少困惑はしたが、どうやら今回の契約はすぐに履行できそうだ……と、思っていたのだが。

「ゴホッゴホッ！」

殺風景な寝室に男の咳き込む音が響く。咳をしていたのは肥え太った中年の男だった。

見るからに豪奢な衣服を纏まとっていることからおそらくは貴族なのだろう。

男はベッドの縁に座る私の契約者である少女の傍らに立つと、頬を掻き照れたように笑った。

「いやあ、酔っぱらって裸で寝ていたらご覧の通り風邪を引いてしまつてね！ 参った参った！

げほっ！ ごほっ！」

目の前で無遠慮に咳をする男。病弱な少女からすれば、不快極まることだろう。

だがそんな相手に対しても彼女は無表情のまま、左手を掲げて歌うように告げた。

「——治つて」

直後、少女の身体から白色の淡い燐光りんこうが溢れ出す。

それは掲げられた手を通じて、肥えた男の身体に流れ込んでいった。

十秒ほどそうした後、少女が手を下すと光は霧散して消える。

その直後、男は「おお！」と声を上げて嬉しそうに腹を揺らした。

「嘘のように身体が軽いぞ！ やはり風邪を引いた時はお前の『加護』で治すに限る！ 医者が処方する風邪薬なんぞ苦くて飲めたものではないからな！ わっはっは！」

顔色が良くなった男とは対照的に、少女は今にも倒れそうな程に青白い顔をしている。

しかし男はそんな彼女の様子をまるで気に留めることもなく「また体調が悪くなった時は頼むぞ！」と言って、上機嫌な足取りで部屋を出て行った。

力を使った後遺症か、少女は荒い息を吐きながら苦しそうに胸を押さえている。

それから五分ほどが経つと、幾分か体調が戻ったのだろう。

少女は汗ばんだ顔で「ふう」とため息をつき、ベッドに仰向けに寝転がった。

「……悪魔さん、いる？」

姿を消して様子をうかがっていた私は、少女の声に呼ばれてベッドの傍に実体化する。

彼女は上半身を起こして私に向き合くと、□元を緩めて笑った。

「どう、私の“加護”は。大したものでしょう？」

「加護」——神々に寵愛^{ちよあい}を受けた人間が授かった奇跡の力。少女が持つそれは、どんな魔法や薬でも治せないような怪我や病を、瞬時に治癒することができるというものだった。

なるほど、確かにそれは神の御業と呼ぶのにふさわしい力だろう。

生まれた場所さえ違えば、彼女は聖女とすら呼ばれたかもしれない。

だが——

「ええ、大した力です。それに自らの命を擦り減らしてまで他者を救わんとする貴女の自己犠牲の精神。実に献身的だ」

人の身で神の奇跡を再現するためには、代償^{だいしょう}として生命力を消費する。

普通の健康な人間であれば消費した生命力はいずれ回復するが、生まれつき病弱だった少女が加護を使い続けるためには、文字通り命を削るしかなかったのだろう。

その結果がこの有様だ。

「その上、命と引き換えに救う相手があのような醜悪な者達とは。そんな救う価値のない人間のために死ぬほどの苦しみを味わうなど、普通の人間には中々できることはありませんよ。まるで聖女のようなだ」

少女の元には一日に数人、多い時は十人も貴族が治癒を目的にやって来る。

その誰もが治してほしいと望むのは、先程の肥えた男のように、命に支障がない軽い病氣や自己

管理の甘さから起こった腰痛や二日酔いなどといった、わざわざ対価の重い加護を使う必要性を感じないものだった。

それでも彼らは、ただ手間をかけるのがめんどくさい、時間がもつたないからというごくごく利己的な理由だけで、少女の命を無駄に使っているのである。

悪魔と呼ばれる私が言うのもなんだが、欲望に忠実な人間らしい実に醜悪な様だ。

代償^{だいしょう}を取られると知りながら、私を呼ぶ者が後を絶たないのも頷ける。

「ふふ」

□元に手を添えて、くすくすと少女が笑った。

何がおかしい？ 眉をひそめると、彼女は私を見て言った。

「悪魔も皮肉を言ったりするんだ。人間みたい」

一体何を言うかと思えば。

人を破滅においやる悪魔が人を嘲るような皮肉を言うなど、余程らしいではないか。

「私から言わせれば人間こそ悪魔のようですね。病弱な娘の命を利用して金儲けをして喜ぶ親がいるくらいですから」

そう、この少女の両親は彼女が加護を使う度に消耗しているのを分かっているながら、貴族達から治癒の対価として金を受け取っていた。生活が苦しいわけではない。ただ贅沢をするためにである。

「あんなのでも親だからね。産んでもらった恩は返さないと、でしょ？ それに——」

腕を組んでふふんと、自慢気に少女は言った。

「救いを求めている人が、みんなどうしようもない大人ばかりってわけじゃないのよ。まだ私が今より元気だった時は、孤児院に行って子供の病気を治したりもしていたんだから」

あの両親がただの善意で、彼女にそんなことをさせるとは到底思えない。

おそらくはなんらかの下心があつての行動だろう。

勘の良い少女もそれは分かっていたのだろうが、この誇らし気な表情を見るに、どんな事情があるうとも本当に困っている人間を助けられたことが嬉しかったに違いない。

……本当になんなのだこの娘は。なぜあの欲の権化(けんげ)のような両親から、こんなにも無欲で善良な心を持つ娘が生まれてきたのだろうか。不思議で仕方がなかった。

「生まれつき病弱でなんの取り柄もなかったこんな私でも、世のため人のために役に立っているんだもの。こんなに素晴らしいことってないわ。だから感謝しているのよ、この加護を与えてくれた神様にはね」

「義理堅いことです。愚かしい程に」

「お褒めに預かり光栄だわ」

そう言つて少女はカラカラと。まるで悲壮感を感じさせないような明るい笑みを浮かべた。

……やはり理解できない。どうしてそんな無邪気な顔で笑える？

どうしようもできない自分の状況に、なにかもを諦めて自棄になつていいのか？

「ごめんね、すぐに願いを叶えさせてあげられなくて」

不意に、彼女が真面目な様子でそんなことを言つた。

「まさか私を元気にするための術に、私の魂が耐えられないなんてね」

少女によつて呼び出された曰。

契約を交わした私は、彼女の願いを叶えるために呪法をかけようとした。

しかし、長い年月をかけて加護の反動を受けてきた彼女の魂は、安易に触れれば崩れてしまいそうな程にもろくなつていた。

そんな状態で呪法をかければ、健康な身体を得る前に彼女の命は永遠に失われてしまうだろう。

それ故に私は願いを叶えることができず、未だこの場所に留まつていた。

「まったく、とんだ災難です」

「今からでも他の願いに変えようか？」

「侮らないで下さい。悪魔が一度交わした契約を違えるなどあり得ません」

私がここに留まつている理由は悪魔としての矜持(きやうじ)によるものだ。

不憫な人間の少女に情を抱いてしまったからでは断じてない。

彼女よりもっと悲惨な目にあつていた契約者など、過去に腐るほど見てきた。その時ですら私は顔色一つ変えることなく、願いを叶えた代償(だいしょう)として対価を頂き、契約者を破滅させている。

そんな私が今更どこにでも転がつているようなありふれた悲劇に、感情が動くことなど――

「あーあ、私の加護が自分に使えたら良かったのね。あ、でもそうしたら悪魔さんに願いごとをする必要もなくなっちゃうか。ふふっ」

そう言つて、少女は楽しそうに笑う。

……また分らないことが増えた。

なぜこの娘は、こうも陰のない顔で笑うことができるのだ？

悪魔にすぎる人間はすべからく、その瞳に暗い負の感情を浮かべているものだというのが、

「ここ最近はずっと調子が悪いのよね。元から良い時なんてないけど、それでもマシな日はあるから、その時なら悪魔さんの術をかけてもらっても大丈夫かなあ？」

「……もう眠りなさい」

手を伸ばし、話し続けようとするおしゃべりな彼女をそっとベッドに寝かしつける。

「悪魔さん……？」

首を傾げる少女に私は淡々とした声音で告げた。

「願いは必ず叶えます。貴女は余計なことを考えずに、自分の体調のことだけを考えていればいい」

「……悪魔ってみんなそんな真面目で律儀なの？」

されるがままにベッドに身を任せながら、彼女はおかしそうに笑う。

「ふふっ。私、悪魔でもっと悪い人だと思ってた。貴女はきつと良い悪魔なのね？」

「契約を遵守するのは当たり前のことです。善悪など関係ない」

思わずため息をつく。本当になんなのだこの娘は。調子が狂う。

「すごい正論。まるで先生みたい」

少女が目を閉じる。はしゃいだせいで疲れたのか頬はわずかに紅潮し、額には汗が浮かんでいた。

この様子ではすぐに眠りにつくだろう。

そう思い再び姿を消そうとすると、彼女は眠そうな声でつぶやいた。

「……もしかしたら、悪魔よりも人間の方が邪悪な存在なのかもね」

それだけ言うと、少女はすぐに安らかな寝息を立て始めて眠りにつく。

一日のほとんどの時間をベッドで過ごしながら、この世の真理を知っている賢者のように真に迫ったことを言う。まったくおかしい娘だ。

そして彼女の言っていた、悪魔よりも人間の方が邪悪だという話は……おそらく正しい。

なぜなら悪魔と呼ばれる邪悪な存在を生み出したのは、そもそも人間の身の丈に合わない欲にまみれた願望なのだから。

◇ ◇ ◇

それから一か月が過ぎ。

衰弱した少女は最早ベッドから、自力で起き上がることすらできなくなっていた。

そんなある日、以前に風邪を治してもらいに肥えた男が再び彼女の元にやって来た。

「いやあ、ちょっと羽目を外して酒を飲み過ぎてね！ 身体の調子がすこぶる悪いんだ！」

男は無遠慮に少女が寝ているベッドに近づく。

まだ酒が残っているのか、その顔は赤らんでいて身体からは酷く酒の匂いが漂っていた。

「お前の力があると思うと歯止めが効かなくてなあ、いつものようにちよちよいと頼むよ！」

青ざめた顔で憔悴^{しうさい}しきった少女を見ても、男は当然のようにそう言った。

良心の呵責^{かしやく}や罪悪感などといった言葉は、この男の頭には一切ないのだろう。

そんな男の両隣には少女の両親が立っていた。少女が着ている質素な寝間着とは違い、豪奢^{ごうしゃ}な燕尾服^{えんぶく}とドレスを纏^{まと}った二人は、少女を見下ろして笑顔で口を開く。

「この方は大切なお客様なんだ。早く治して差し上げなさい」

「いつまでも寝ていないで起きなさいな。失礼でしょう？」

私は不思議で仕方がなかった。どう見ても彼女はもう治癒の加護を使えるような状態ではない。

だというのに、彼らは目の前で死にかけている自分達の娘を見ても心配する素振り一つないどころか、早く起き上がって二日酔いの男を治せという。

金儲けの道具である少女を失えば、自分達も贅沢^{ぜいたく}がでなくなるというのに。欲に目がくらむあまり現実が見えていないのか。それとも見て見ぬふりをしているのか。

まったくもって理解しかねる。

「……悪魔さん」

弱々しいかすれ声で少女が囁く。

目を閉じて仰向けに寝ている彼女は、悪魔である私にしか聞き取れないような小さな声で言った。

「……数秒だけでいい。私の身体が耐えられるわずかな時間だけでいいから——願いを叶えてほしいの」

それは、人間達の欲望を自らを犠牲にして叶え続けてきた少女の、この世で最後の願いだった。

まだ彼女が一人で動ける時でさえ、呪法に耐えられないと判断して願いを叶えなかったのだ。

今少女の願いを叶えれば、待っているのは確実なる死だろう。だが私は——

「……」

ベッドで仰向けになっている少女の背に手を添えて、支えるように上半身を起こす。

起き上がった彼女は、閉じていた目をゆっくりと開いた。

「——ありがとう」

そうつぶやくと、少女はゆらりと身体を揺らしながら、自らの足でベッドから床に降り立つ。悪魔の力をその身に宿した証、黒い光の粒子を纏^{まと}ったその姿は、明らかに尋常な様子ではなかった。

「なっ、なんだその光は!？」

肥えた男が困惑した表情で少女から後ずさる。

彼女は俯いて表情を隠したまま、肥えた男を追い詰めるようにゆっくりと近づいた。

「二日酔いくらい——」

そしてその場でしゃがみ込むと、腰だめに握り込んだ左拳を——

「自分でなんとかしろポケー——」

勢いよく飛び上がると同時に、男の顔面に叩きつけた。

「ほげえええ!？」

少女に殴り飛ばされた男は、絶叫をあげながら壁に叩きつけられる。

一瞬の出来事に、彼女の両親は口と目を大きく開けたまま呆然として固まっていた。

「……ふう」

少女が深く息を吐いてから、私に向かって振り向く。

「スカッとした！一度でいいからムカつくヤツの顔を思いつきりぶん殴ってやりたかったのよね！」

今までずっと溜め込んでいた鬱憤^{うつぶん}を吐き出したからなのだろう。

その表情は今までに見たことがないくらいに、達成感に満ちた満面の笑みだった。

「ありがとう、悪魔さ——」

不意に、張り詰めた糸がプツンと切れるように。少女はその場に膝から崩れ落ちた。

その瞬間、止まっていた時が動き出したかのように、彼女の両親が悲鳴をあげる。

「きゃあああ!？」

「な、なんということを！お前は自分が何をしたか分かっているのか!？」

少女の父親が怒りの形相を浮かべて、蹲っている彼女に近づいていく。

父親は少女を平手で叩こうとしているのか、大きく手を振り上げた。

「——その娘に触れるな」

姿を現し父親の前に立ちはだかる。

突然現れた私の姿に父親は目を見開いた後、恐怖に引きつった顔で悲鳴をあげた。

「ひっ!? ば、化け物!」

そう、これが私を見た者の普通の反応だ。

悪魔に対して無邪気に笑いかけたり、世間話を楽しもうとしたりする人間など。

後にも先にも、もう二度と現れないだろう。

「強欲で愚かな人間達よ。お前達はこの娘から人生を奪い取るだけでは飽きたらず、命まで奪おうというのですか？」

驚くほど冷たい声が自分の口から出た。

どうやら私は、目の前の人間達に怒りを覚えているらしい。

人間を破滅させる悪魔が人間に情を覚えるなど、笑い話にもならないというのに。

「悪魔……さん……」

背後から聞こえてきた、今にも消え入りそうな少女の声に振り向く。

悪魔の力がまだ残っていたのか、かろうじてその場で膝立ちをしていた彼女は、その言葉を最後に力を使い果たしたのか、こちらに向かって倒れ込んだ。

私は咄嗟にしゃがみ込み少女を抱き留める。

やせ細って今にも命の灯が消えんとしているその身体は、驚くほどに軽かった。

「けほっ……契約の、対価を……」

血が混じった咳を吐きながら、少女は困ったような顔で口を開く。

「私には、大切な物なんてなにもないから……もし願いが叶ったら、私の命をあげようと思っているのに……すぐに死んじゃうこんなボロボロの命じゃ、全然釣り合わないよね……ごめんね……?」

「……もう喋るな」

少女の頭に手をのせて、優しく撫でる。

私の力でせてこれ以上痛みも苦しみも感じることがないように、死なせてやろう。

たった一か月ではあったが、毎日のように言葉を交わした彼女には、私が何をしようとしているのか伝わったに違いない。少女は目を細めて私の手に頭を擦りつけると、嬉しそうに微笑んだ。

「もし私が次の人生で健康な身体に生まれ変われたら……今度こそちゃんと対価を差し出すから、必ず会いに来てね……『約束』だよ……？」

私の手から放たれた黒い光が辺りに満ちる。

命を奪う悪魔の黒い光を浴びた彼女は、ゆっくりと目を閉じて。

傷みも苦しみも感じることなく、穏やかな顔で眠るように——死んだ。

「……ええ、『約束』です。貴女の魂はたとえ生まれ変わって姿形が変わろうとも——私だけのものだ」

◇ ◇ ◇

——それから気が遠くなるほどの長い年月が過ぎた。

『必ず会いに来てね——約束だよ』

頭の中に、今にも消え入りそうな程にか細い少女の声が響いてくる。

酷く懐かしいその声に私は目を閉じ、少女と別れた彼の日に思いを馳せた。

そうか。ようやくあの人間の少女が、この世界で新たに生を受けたのか。

「——どうしたグラハール。また悪魔のお前に身の丈に合わぬ願い事をする、愚かな人間の声でも聞こえたか？」

すぐ傍から聞こえてきた声にまぶたを開く。

目の前には魔王城の玉座に座す、黒衣を纏う灰髪の男——魔王ダンテロードの姿があった。

私は胸に手を当て、小さく会釈しながら口を開く。

「ええ。私を求める声が聞こえました。よってしばらく暇を頂きます」

「……何？」

私の返答に魔王が眉をひそめた。自分から言っておきながら、本当に私が人間の願いを叶えるためにここから離れようとは思ってもいなかったのだろう。

気の毒に思うが、彼に納得されなからうが私がやることはすでに決まっていた。

「待て。お前は今我と契約しているはずだろう。私の願いが叶うまで他の者の元へ向かうなど許さ
んぞ」

最もな話だ。まだ願いを叶えている最中の契約者を置いて、別の者の願いを叶えに行くなど不義理にも程がある。悪魔は契約者から契約の対価として大切な物を奪う代わりに、決して人を騙さない。それが私達が自らに定めているルールだった。だが——

「いいえ、行かせて頂きます。なぜなら契約を交わしたのは、貴方よりも彼女の方が先ですので」

そう、これはもう何百年も前。

遙か昔に交わされた一人の人間の少女との、一度は途切れてしまった契約の続き。

かつての契約者だった彼女が再びこの世に現れたのが分かった以上、そちらを優先するのは契約を重んじる悪魔としても当然の行いだらう。

「性急過ぎるな。らしくもない。本当に理由はそれだけか？」

不審な声音で投げかけられた魔王の問いに答えず、私は目を閉じた。

その選択に私情は含まれていないのかと、暗に彼は私に問うている。

魔族の敵である人間を優先するのかと、不満を露にしているようにもみえた。

気持ちとは分らないでもないが、彼の邪推にはなんの意味もない。悪魔にとつては生きとし生けるすべての存在が、契約で結ばれるだけの割り切った関係に過ぎないのだから。

「——ええ。あくまでこれは、先約の方との契約を果たしに行く。それだけのことですから」

◇ ◇ ◇

一か月後。

淀んだ紫雲に覆われた暗い魔大陸の空とは対照的に、雲一つない鮮やかな青空が広がるロマンシア大陸の良く晴れた日の朝。

私はパリスタン王国という人間の国にある、ヴァンディミオン領という土地を訪れていた。

目的は私とかつて悪魔の契約を交わした、約束の少女に会うことである。

使い魔によってあらかじめ調べた情報によれば、今世の彼女はこの領の領主であるヴァンディミオン公爵の娘として生まれ、現在の年齢は七歳。

その子供とは思えないほどの聡明さに、自信を無くした家庭教師達が次々に職を辞してしまい、困り果てたヴァンディミオン公爵は彼女に見合う優れた家庭教師を見つけるのに苦心しているらしい。そこで私はその日ヴァンディミオン邸を訪れるはずだった、王室家庭教師に成り替わって少女に接触することにした。

かつて前世の彼女と交わした契約を成し遂げるために。

「ごきげんよう。私、スカーレット・エル・ヴァンディミオンと申します」

ヴァンディミオン邸の庭先で、スカーレットと名乗った少女がドレスのスカートの裾をつまみながら、優雅に会釈をした。

長く美しい銀髪に、透き通るような青い瞳。人形のように整った顔立ちも含めて、正にスカーレットは私が数百年前に契約した少女の生き写しのようなだった。

「貴方のお名前は？」

無表情で問いかけてくるスカーレットを見て、おそろくは懐かしいと感じたのだろう。

わずかに揺れる自分の心を律しながら、私は頭を下げ会釈を返した。

「ごきげんよう。本日より家庭教師を務めさせていただく、グラハールと申します」

そう言うて頭を上げるとスカーレットは私ではなく、じっと私の頭上を見上げていた。視線を追



うとそこには銀の体毛と赤い尾を持つ一羽の鳥が、木の枝に止まってこちらを見下ろしている。

ああ、あの鳥は――

「スカーレットテイル」――繁殖時のみ気候が穏やかな他国に渡り、子育てが終わると故郷に戻って行く、北方の小国に生息している希少種です。遠く離れたこの国で見かけることは滅多にないのですが、珍しいこともあるものですね」

「――」

独り言のようにつぶやいた私の言葉に、先程までの冷めた様子とは一転して、スカーレットは興味津々といった目で私を見上げてきた。

天真爛漫てんしんらんまんだった記憶の少女と違って随分と大人しい性格をしていると思っていたが、どうやら好奇心が旺盛すかんなのは変わっていない鳥ですのに……お詳しいんですね。貴方の専門は生物学なのですか？」

「いいえ。私の専門は別のことです」

「では独学で？ 博識でいらっしゃるのね」

感心するスカーレットを否定するように、私は首を横に振る。

「このようなことは人に誇るほどの知識ではありません」

長く生きている以上、生物に関しての知識は人間の比ではないが、そもそも知っていて当然だ。なぜならあの鳥はスカーレットを探らせるために、一か月前からここに送っていた私が使役している使い魔なのだから。

「数多の国を渡り歩いている最中に、自然と覚えたものです」

「数多の国を……」

目を輝かせるスカーレットにやはりと得心した。

調査して分かったことがある。それは年齢にそぐわず高い知性を持つてしまったスカーレットにとって、最早この家で得られる程度の見識は狭すぎるということだ。

高貴な家柄の上、さらに特別な加護を持つて生まれてしまったが故に、幼い彼女は国どころかほとんど領地から出ることすら許されていない。

よって両親や教師の教えや、本で得られる知識だけがスカーレットにとってのすべてであり、世界そのものとなっていた。それ故に私のような本に載っていない外の世界を知っている存在に、特別に興味を惹かれているのだろう。

「その好奇心旺盛なところ……本当に何百年経っても変わりませんね貴女は」

□元が妙に緩い。私はきつと、笑っているのだろう。

この私に未知の感情を与えてくれた彼女と、再び同じ時を歩めるといふ喜びに。

「……ただの契約相手である人間に対してこのような感情を覚えるなど、私は悪魔失格だな」

「……？　今なにかおっしゃいましたか？」

不思議そうに首を傾げる彼女に、私は再び会釈えしやくをして告げた。

「これからよろしくお願いいたします——スカーレットお嬢様」

第二章　先生、今のは何点ですか？

——貴女が人生の歩みを止める時、魂（対価）を頂きに参ります。

「……先生？」

夢と現の狭間。意識が覚醒する間際の微睡みまどろみの中で、グラハール先生の低く落ち着いた声が聞こえた気がした私は、ゆっくりとまぶたを開きました。

「……ここは」

仰向けに寝かされた背に感じるベッドの感触。

天を仰ぐ視界に映るのは薄暗い空間と、天井に灯る紫色のシャンデリア。さらに視線を動かし周囲を見渡すと、ここは石壁に囲まれたどこかの部屋であることが分かりました。

「どうやら寝室……のようですわね」

寝かされていたベッドから上半身を起こします。

調度品一つないあまりに殺風景な空間なので、もしやここは牢なのでは？　と疑いましたが。

それにしてもやけに部屋が広いですし、埃一つなく手入れも行き届いているので、一応は寝室の体を為していると判断いたしました。ベッドもふかふかですしね。

「もしベッドまで石造りだったら、間違いなく牢屋認定をしていたでしょうが。さて——」

ベッドから降りて伸びをしながら身体の調子を確かめます。

度重なる戦いの末、限界まで消耗したはずだった私の体力や魔力は、まるで何事もなかったかのように完全に回復していました。不思議なこともあるものですね。ちょっとやすつとの休息で、回復するような状態ではなかったはずですが。

もしや今までの戦いはすべて現実のものではなく、先程まで見ていたような夢だったのでしょうか？

「……いえ、さすがにそれはあり得ませんわ」

自分の身体を見下ろすと、身に纏まとっているお気に入りの赤いドレスはすっかりボロボロになっていました。

「ここまで随分と無理をしてみましたのね」

リンドブルグの港街では、私達が魔大陸に渡るのを妨害せんとする冒険者達と。

魔の海域では、私達を海上で亡き者にしようと船に乗り込んできた、蠍さぐりの方々や魔物達と。

魔大陸に渡ってからは、魔族の集落を襲撃する頭のおかしな太陽神教の方々と。

様々な場所で様々な方々と殴り合いに興じてきました。

その結果がこの有様です。道中、魔大陸に渡る船に荷物をほとんど持ち込めなかった都合上、替えのドレスも用意できませんでしたし、一着しかない衣服がこうなるのも止む無しではありました。それに――

「まったく、随分と派手にやってくれましたわね。勇者パーティーの方々は」

魔王城の執事であるヤギ頭さんの魔法によって転送された、エイビス山の頂上――その遙か上空に浮かぶ魔王城の前で対峙した、二人の男女。勇者パーティーのメンバーである、シーとミューとの戦いでは不覚にも手痛い攻撃を受けてしまいました。

それもこれも私の拳によって完全にブチのめされたはずの二人が、クソ太陽神様の余計な茶々によって、力を増して復活してきたせいです。

おかげで殴ったクズ共を見下ろしてスカツとするという、私の至上命題も果たせませんでしたし、お気に入りのドレスもボロボロになるしで、もう最悪でした。

これには普段温厚な私も、思わず頭にきてしまいましたわ。よって――

「クソ太陽神とそれに与する方々全員に誓いますわ。この借りはいつか千倍にして返させて頂きます――この拳で」

殺意も新たにしたところで、正しく現状を認識しましょうか。竜魔晶石りゅうましょうせきも尽き、シーとミューに追い詰められた私は、あわやという場面で魔王ダンテロードことダンテさんに助けられました。そして疲労と負傷が積み重なり、意識を失いかけた私は――

「――失礼いたします。メエ」

不意に聞こえてきた殿方の声に思考を中断します。

部屋の隅にあるドアの方に振り向くと、執事姿をしたヤギ頭の方が入ってきました。

ベルフェゴールさん――私を魔王城まで送って下さった方ですね。

「お体の調子はいかがですか、メエ」

首を傾げてそう尋ねてくる彼の顔はヤギそのもので、人間の私からすると何を考えているのかまったく読み取れませんでした。おそらくは言葉通り、私の身を案じてくれているのでしょうか。「ごきげんよう、ベルフェゴールさん。お陰様で……」と言っているのか分かりませんが。すっかり良くなりましたわ」

なにしろ今まで意識がなかったため倒れた後、自分がどんな経緯を辿ったのかすら分かりません。そのような状況では曖昧な物言いになるのも仕方がないでしょう。

そんな私の考えが伝わったのか、ベルフェゴールさんは頷いて言いました。

「魔王様のご指示により倒れた貴女を治療した後、城内で保護させて頂きました」

そうではないかと思っておりましたが、城内ということはここはおそらく――

「ここが真の魔王城、というわけですか」

「その通りでございます。メエ」

ダンテさんが言っておりましたね。本来の魔王城は浮島に立っている古城ではなく、入口となっている古城の「門」を越えた別の空間に存在すると。

今この部屋を見ている限りは、特に普通のお城と変わった点は見られませんが、一体この部屋の外はどうなっているのでしょうか。

壁際にある窓からは、ここが別の空間だからなのか真つ暗で深い闇しか見えませんし。

そんな風に私が思案していると、ベルフェゴールさんは申し訳なさそうに頭を下げました。

「人間が滞在することは考慮されていませんので、急遽空き部屋にベッドを持ち運び寝室とさせて

頂きました。さぞ過ごし辛かったことでしょう」

「お気になさらずに。ずっと寝ていただけですので特に気にはなりませんでしたわ。保護していた感じ感謝いたします」

この口ぶりだとまるで魔族は人間と違い、ベッドを必要としないかのようですが。

でも私が泊まった魔族の村には普通にベッドがありましたし……城内で雑魚寝でもしているのかしら。と、私が疑問に感じているのが伝わったのでしょうか。

ベルフェゴールさんが「実は」と口を開きました。

「濃い魔力の闇に包まれた魔王城の中では、魔族は活力に満ち睡眠を必要としません。よって寝室も存在しないのです。メエ」

「そういうことでしたか。納得いたしました」

つまり魔族の方々はこの城内では外よりも力を増している、ということですね。

状況次第では戦いになることもあり得ますし、これは注意が必要ですわ――あら？

「その手に持っているドレスは……？」

その時ふと、ベルフェゴールさんが両手に抱えている物に気が付きました。

「お召し物が傷んでおりましたので、お着替えをお持ちいたしました」

ベルフェゴールさんが近づいてきて、私に畳まれたドレスを差し出してくれます。それは黒いレースとフリルが各所にあしらわれた、見るからに上等な生地が使われたドレスでした。

強力な魔力の気配も感じるので、おそらくは魔道具の類でしょう。

「魔王様曰く、遠路はるばるここまで辿り着いた貴女への褒美だとのことです。どうぞ遠慮せず受け取ってください。メエ」

「……そういうことであれば、有難くお借りいたしますわ」

これ以上ダンテさんに借りを作りたくないので少し迷いましたが、お返しを前提にお借りすることにいたしました。

相手が敵対している魔族とはいえ、ここは王の居城。

このようなはしたない格好で歩き回っては、一淑女として失礼に当たりますからね。

「着替え終わりましたら、魔王様の元までご案内いたします。私は部屋の外で待つておりますので、どうぞごゆっくり。メエ」

そう言うのとベルフェゴールさんは、恭しい態度で礼をして部屋を出て行きました。

案内していただけるのは好都合ですわね。ここが魔王城と分かった時点で、ダンテさんには早々に会いに行かなければと思っていましたし。それに――

「お話することがたくさんありますもの。ね、グラハール先生」

勇者パーティーと戦った後、気絶する寸前に話したいことがたくさんあると言った私に、先生は仰いました。どんな質問にもお答えしましょう、と。

以前、ヴァンキッシュでお会いした時は本当に一時だけの邂逅で、敵に追い込まれた切迫した状況だったこともあり、まともにお話することは叶いませんでしたから。

私の今までのことや、先生自身のこと。お話したいことがたくさんありましたのに。

「今回は心行くまでゆつくりと、お話したいものですが……」

私にとってここはまったく未知の場所。城の主であるダンテさんに招待されて来たとはいえ、これから先何が起こるかはまったくの未知数です。気を引き締めていきましょう。

あとついでに拳も引き締めます。いつでも殴れるように。

「着替え終わりましたわ」

ドレスに着替え終わった私がそう告げると、ドアが開いてベルフェゴールさんが会釈をしました。「それでは魔王様の元までご案内致します」

ベルフェゴールさんに頷き、ドアの外に出ます。

そこには石造りの幅十メートルにも及ぶ広い廊下が、前と後ろに延々と続いておりました。

壁には薄紫色の明かりが灯るランタンが等間隔に掛かっていて、暗い廊下をぼんやりと怪しく照らしております。終わりがまったく見えずに無限に続いて行く廊下のその様は、まるで合わせ鏡の
中の世界のようなでした。

「この長さの廊下を日常的に歩くのは中々良い運動になりそうですね。それに――」

廊下の途中にはドアがたくさん並んでいました。その中がすべて、私がいた部屋と同じ作りとな
っているのであれば、見える範囲だけでも相当な人数の魔族が居住できそうですね。

周辺に物音一つ、人の気配すら一切感じないことから、どうも部屋はすべて空き室のようですが
「随分とたくさんのお部屋を持て余しているようです。ホテルでも開業なされては？」

私の言葉に先を歩いて行こうとしていたベルフェゴールさんは、何かを思い出したかのように立

ち止まりました。

彼はこちらに振り返ると人間の物とは違う横に細長い瞳孔を、さらに線のように細めます。

「一つご注意を。ここからはどうか、私から絶対に二メートル以上離れずについて来てください。それと廊下に並んでいるドアには決して触れないようお願いします。メエ」

そう言うとは彼は私に背を向けて、廊下の奥へと歩き出します。

この言いかた、ただ私が道に迷うことを心配しているものとは違いますわね。

もしや何か注意しなければ、命に関わるような仕掛けでも施されているのでしょうか。確かに人の気配はないものの、周辺一帯には目に見えない濃度の高い魔力が充満しているのを感じますが。

「……触らぬ神になんとやら、ですか。ご忠告、承りましたわ」

それから五分程廊下を歩いたでしょうか。

不意にベルフェゴールさんが、私の前でピタリと立ち止まりました。

彼は廊下の先と来た方向である私の背後を、キョロキョロと何度も見やります。そこには部屋を出た時からまったく変わらないう、ドアが延々と並ぶ果ての無い廊下が広がっております。

「いかがなさいましたか？」

「……いえ、なんでもありません。メエ」

私の問いにそう答えたベルフェゴールさんは、再び廊下の先を歩き出します。

先程より心なしか焦りの見える早歩きで。

もしやこのお方、道に迷……いえいえまさか。

自分が暮らしている家も同然のお城で、そのようなことになるはずがありませんわよね。

「あの、ベルフェゴールさん……？」

しばらく様子を見てみると、ベルフェゴールさんがおもむろに廊下の壁に張り付きました。

そしておそろのおそろといった様子で、すぐ傍にあるドアを少しだけ開きます。

先程はドアに決して触れるなど、ご自分で言っておりましたのに。

彼は部屋の中をチラリと覗いた後、すぐさまドアをボタンと閉めました。

それから首を傾げると「……メエ？」と不思議そうに鳴きます。

「やはり道に迷って——」

私が言いかけるとベルフェゴールさんは私の方に手の平を突き出して、首を横に振ります。

「グラハール様に使い魔として召喚され、執事として魔王城に勤めだしてから早百五十年。まさかこの私が道に迷うなどそのようなことは絶対にありえませんかメエ」

ものすごい早口でそう言うとは、ベルフェゴールさんは再び廊下を歩き出しました。先程までとは違い、明らかに焦った様子のせかせかとした早歩きで。

そして目についたドアを片っ端から開けては中を確認し、閉めてを繰り返します。

もはやヤケクソです。もう見ていられませんわ。

「あら、手が滑りましたわ」

一心不乱にドアを開けているベルフェゴールさんの後ろで、私もドアを開いて中を覗き込みます。そこには寝室の窓の外から見た物と同じ、真っ暗な闇がどこまでも広がっていました。

試しにもう一つ隣のドアを開けてみると、その中も同じように闇が広がっています。

これは……なるほど。私、どうやら少し勘違いをしていたようです。

「ベルフェゴールさん」

私が呼びかけると、ベルフェゴールさんが動きを止めて私の方に振り返りました。

彼は私がドアを開けている姿を見ると「メッ!」と驚いた声をあげてから、慌てたように口元をあわわと動かしします。好奇心に負けて、私が隠していたドアの向こうを暴いてしまったからでしょうか。少し悪いことをしてしまいましたね。

ですがあのままではいつまで経っても先に進めなそうでしたので、ご容赦願いたいところです。勝手にドアに触れてしまつてごめんなさい。私、最初は貴方が道に迷っているのではないかと思っておりまして。でもこれはそうではありませんね?」

ご本人が独り言のように漏らしていた通り、ここで百年以上も働いている方が道に迷うことなど、余程のことがない限りありえないでしょう。そう、この城の主が何か細工でもない限り。

「辿り着けないようにされている。そうでしょう?」

私の問いにベルフェゴールさんは、観念したように白状しました。

「この廊下にあるドアは、城内の様々な場所に空間を越えて繋がっていますメエ。私はそのすべてを把握していて、本来ならすぐに玉座の間にお連れできるはずだったのですが」

ふうとため息をつき、ベルフェゴールさんが困ったように鼻を掻きます。

「現在はすべてのドアが闇に繋がっているようです。先程にも軽く触れましたが、くれぐれもこの

中には入らないようにお気をつけくださいメエ。もし一度でも入ってしまうと——」

「その先は想像したくありませんわね」

無限の闇が広がるその場所を閉じ込めるように、私は目の前のドアを閉めました。

「魔王城に来た時のように、ベルフェゴールさんが持つ転移する道具でここから移動することはできないのですか?」

「魔王様が支配する闇の中では、転移系の魔道具や魔法は効果を発揮しません。同等かそれ以上の力を持つお方なら話は別ですが。メエ」

「そうですか。それならば諦める他ありませんわね。それにしても——」

一体誰がこんなことを、だなんて。言わずとも明白でしょう。

「ダンテさんの仕業ですわね。一体どういうおつもりでしょうか」

意識を失う前、ダンテさんは勇者パーティーによって跡形もなく崩壊させられたお城を闇の力で包んで、瞬く間に元通りにしてみせました。

彼曰く、闇の中に包んでしまえばすべては自分の思い通りになるとのこと。であれば、闇に包まれているであろうこのお城に関しても、構造を自在に変化させることなど容易いことでしょう。

「ダンテさんは貴方に自分の元へ連れて来いと仰っていたのですよね? ならばなぜ私達を遠ざけるようなことをなさるのかしら」

「さあ……皆目見当もつきません。なにか私には理解できない深遠なるお考えがあるのでしょうか。メエ」

後ろめたいこともあるのでしょうか。ベルフェゴールさんが顔を背けながらぼそぼそと、うつぶやきました。何か心当たりがあるようですね。

でもここでそれを問いただすところで、彼はきつと答えてはくれないでしょう。

「……なんだか腹が立ってきましたわね」

頼み事がある立場のため、今までずっと遠慮をしてきましたが。こちらもいい加減に我慢の限界です。そろそろ実力行使と参りましょうか。

「一応確認したいのですが、この城の内部はたとえ壊れたとしても、自由に作り変えられるのですね？」

「はい。魔王様が作り出した闇の中では、すべてがあのお方の思うがままですから。ですがなぜ今そのようなことを——!?」

意識を集中し、目の廊下に向かって目を見開きます。ここがダンテさんの魔力によって作り出されている構造物であるならば。魔力を支配するこの「イビルクワイ魔眼」で突破できるはずですよ。

「イビルクワイ魔眼」発動——！」

私の目からバチツと紫電が走り、視界の範囲内に存在する魔力を暴走させます。

直後、廊下全体の空間がぐにやりと歪み、螺旋を描くように中心に向かってねじれ出します。

そして次の瞬間、歪んでいた空間は何事もなかったかのように元に戻りました。

視界の先には無限ではなく、二十メートル程の奥行きを持った廊下と、行き止まりとなった最奥には大きな扉が見えます。

「ふう。これでもう道には迷いませんね」

呆然としていたベルフェゴールさんは、私の言葉にハッと正気に戻りました。

「なんとという無茶を……この空間が正常に戻ったのはただの偶然です。運が悪ければ廊下全体が崩れ落ちて、無限の闇に飲まれていたところですよ……!？」

頭を抱えるベルフェゴールさん。

このポーズ、心なしかレオお兄様を彷彿とさせますわ。親しみ深いですね。

「危険は承知の上です。ですが、このままここで手をこまねいても事態は進展しませんから」

ただでもパリスタン王国からここまで到達するのに、数か月も掛かっているのです。

目的を果たして帰る時間を考えたら、あまりうかうかもしていられませんので。

私達の帰りを待っている方々が、国にはたくさんいますからね。

「それで、あのドアはどこに繋がっているのですか？」

「……すでに私が知っている城内の構造とはまったく違うので、正しいかは分かりませんが。あの扉の形と大きさからして、おそらく中庭に続いているドアかと。メエ」

「中庭に出れば、今度は正確にダンテさんの元へと辿り着けそうですね？」

「それは……行ってみなければ分かりません。メエ」

うつむき頼りなさげにそうつぶやくベルフェゴールさん。すっかり案内人としての自信を失ってしまったようです。

一応客人という立場なので、でしゃばらないようにと思っていましたが。

どうもそう言っていられる状況ではなさそうですね。

「このままこうしていても埒があきません。とにかく先に進みましょう」

「メエ」

廊下の奥へと足を進めた私達は、最奥に見えていた扉に辿り着きました。

見上げる程に大きな両開きの鉄の扉は、取っ手を掴んで押し開こうとしてもビクともしません。鍵が掛かっているのか、それとも単純に重すぎて動かないのか。

困りましたわね。加護も竜魔晶石も失った今の私の力では、開くこともましてや破壊することもできそうにありません。さてどういたしましょうか。

「ここは私めにお任せ下さい」

そう言っただけでベルフェゴールさんが扉の前に立ちます。彼は扉についている左右二つの取っ手を掴むと、前に向かって押し込みました。すると私が触った時はあれほど重く固かった扉は、ギイッと鉄が擦れる鈍い音を立てて、あっさりと内側に向かって開いていきます。

さすがは魔王城に仕える程の魔族……いえ、グラハール先生に使い魔として召喚されたと言っていたので、悪魔でしたか。お顔がヤギなので草食系と見せかけて、中々の武闘派ですね。

「どうぞ、お入りくださいませ。メエ」

扉を半分ほど開けたところで、ベルフェゴールさんが横にはけます。

中を確認してから私に道を譲ったということは、危険はないということでしょう。

「ではお言葉に甘えて」

開かれた扉の奥に足を踏み入れます。

するとそこに広がっていたのは――

「まあ。なんということでしょう」

夜よりも暗い闇空の下、壁に掛けられたランタンと、地面に散りばめられた魔鉱石の薄紫色の光だけが、周囲を明るく照らし出す中。

石の城壁に囲まれたそこは、たくさん緑の花々が咲き乱れた庭園になっていました。

「綺麗……それにこの庭園、どこか見覚えがあるような」

石畳を歩き直ぐ植え込みに近づきます。そこには大小様々な植物が瑞々しく綺麗に伸びていて、どれもしっかりと手入れされているのが分かりました。

「どなたか庭師の方でもいらっしゃるのかしら」

近くで見て既視感の正体がわかりました。この庭園、草花の種類こそ違うものの色合いや植え込みの配置が、我がヴァンディミオン家のお庭にとてもよく似ています。

ということはもしや、このお庭をお世話しているのは――

「……あら？」

その時、足元の草花の間からひょっこりと。見たこともない小さな生物が顔を出しました。

手の平程の大きさをした真っ白でふわふわの毛玉のような身体に、くりくりとした大きな二つのお目目。それに額から小さな角を生やしたその生物は、全身からほのかな光を放ちながらジッと私を見上げていました。



「可愛らしい。貴方はここに住んでいる妖精さん？」

しゃがみ込んで問いかけると、毛玉の子は「ピー」と小さく鳴いて駆けていきます。

驚かせてしまったかしら。

そう思って立ち上がると、毛玉の子はくると私に振り返って「ピー」と再び鳴きました。

その仕草はまるで、私のことをその場でじっと待っているかのようです。

「ついて来てほしいの？ でも……」

ベルフェゴールさんに確認を取ろうと背後を振り向きます。入口の扉の前で立っていた彼は、状況を察したのか無言でコクリと頷きました。好きに寄り道をしていいということでしょう。

会釈を返した私は、毛玉の子について行くことにしました。

「それにしても、見たこともない種類のお花ばかり咲いていますわね」

歩幅の狭い毛玉の子が一生懸命に走って行く後ろ姿を、ゆっくりと徒歩で追いかける傍ら。

左右に広がる花壇に目を向けます。鮮やかな紫色をした花々は、おそらく魔界にだけ生息する特殊な種なのでしょう。そのどれもが凶鑑で覚えた私の知識にはない物でした。

「太陽光が届かないこの場所では、普通の草花は絶対に芽吹きませんものね」

吹き抜けになっている空を見上げると、そこには一面の闇が広がっています。凄まじい魔力を感じることから、それは夜空ではなくダンテさんが支配している闇の結界なのでしょう。

「城内の窓から見えていた闇の正体はこれですか」

月や星の光もなく、雲一つとして見えない夜空など本来ありえませんか。

「魔鉱石の灯りがそこら中で光っていないければ、視界が闇で覆われて一步先すら見えなかったでしょうね」

ふと、毛玉の子が立ち止まります。

眼前には私の背丈よりも高い植え込みが横に立ち並び、視界を遮っていました。しかし毛玉の子はそんな障害物を物ともせず、勢いよく草木の中に飛び込んで姿が見えなくなります。

「……横から遠回りでもできないではないですが」

ズラリと並んだ植え込みは十分遠くまで続いているようで、徒歩で回り込むとなると少し時間が掛かりそうです。その間に毛玉の子が逃げてしまったら、ここまでついてきた意味もなくなってしまうですね。

「ごめんあそばせ——ふっ！」

両足に力を込めて飛び上がり、二メートルはある植え込みを飛び越えます。

身体強化ができなくとも、普段から鍛えているのでこの程度は造作ありません。

問題があるとすればお行儀の悪さですが、ここにはそれを指摘するレオお兄様はいらっしゃらないので問題なしです——と黙っていたのですが。

「——お転婆なのは相変わらずですね。スカーレットお嬢様」

着地した私は聞こえてきた殿方の声に顔を上げます。

そこにいたのは、私がお会いたいはずと願っていたお方でした。

「もう、お恥かしいですね。見苦しいところを見られてしまいましたね——グラハール先生」

水差しを片手に持ったグラハール先生が立っていました。もう片方の手には剪定用のハサミを持っています。思いがけず出会ってしまったので何から話そうか迷いましたが——

「もしやこの庭園は先生がお手入れを？」

先生が両手に持っている、魔王城という殺伐とした場所にはあまりに場違いな園芸道具に興味を惹かれたので、とりあえずそのことから尋ねてみることにしました。

「いえ、私はあくまで彼らの手伝いをしているだけです」

「彼ら……？」

首を傾げると、先生の右側にある花壇から何匹もの毛玉の子達が飛び出してきました。

彼らは左側の花壇に一目散に駆けて行くと、雑草を口に咥えて引き抜いたり、頬を膨らませて水を花に吹きかけたりと、忙しく動き始めます。

それを見ていた私はふと、幼い頃に先生に教わった記憶が蘇ってきました。

「森に棲み、緑を育む魔大陸にのみ生息する小さな毛玉の妖精。確か名前はレプリコンでしたか」

「正解です。よく覚えていましたね」

「当然ですね。あの日、先生から受けた教えは一語一句逃さずに、私の心の内に留めてありますもの」

胸を張って誇らしい気持ちでそう告げます。

すると先生は私の調子を確かめるように、ジッとこちらを見つめてきます。

「身体の調子はいかがですか？ 完全に治癒したとはいえ、あれだけの魔力を消耗すればどうして

も疲労感が残るものでしょうか」

「おかげさまですっかり元気になりましたわ。普段より調子が良いくらいです」

そう言つてグツと左拳を握り込んで見せると、そこでもうやく先生は安心したのでしょうか。

フツと穏やかに微笑みを浮かべました。

子供っぽいと思われるしまったかしら。先生の前ではつい、子供の頃のように無邪気に振る舞つてしまう自分がいます。なんだか気恥ずかしいですね。

「それはそうと、まさか先生と先にお会いできるとは思いませんでしたわ。てっきり私はダンテさんとお話した後に、先生とお会いすると思っていましたから」

私の言葉が予想外だったのか、先生が眉をひそめます。

「ダンテ様とまだお会いしていないのですか？ ベルフェゴールには貴女が目覚ましたらまず、ダンテ様の元にお連れするようにと命じていたはずですが——」

その時、どこか遠くの方から地響きと共にドーン！ と。

凄まじい轟音が聞こえてきました。

「今の音は……？」

身構えながら音が聞こえてきたであろう、城壁の向こうに視線を向けます。

先生は険しい表情で音の方を一瞥した後、何かを逡巡するように目を閉じました。

「状況は分かりました——ベルフェゴール」

先生の呼び声に、いつの間にか背後に立っていたベルフェゴールさんが「メエ」と声をあげます。

「スカレット様を私の応接室までご案内して下さい。そこまでのドアは私が作っております」

「承りました、我が主」

恭しく頭を下げるベルフェゴールさんに先生は頷くと、目を開けて私に向かって振り向きます。

「積もる話もあるでしょう。先に応接室で待っております」

「はい。また後ほど」

会釈をして去って行く先生を、私は同じく会釈をして見送りました。

何が起つたのでしょうか。状況を説明して頂きたいところではありましたが、これから応接室でお話すると先生が判断したということは、即座に危険はないということなのでしょう。

「とはいえ、気になるものは気になりますわね」

先程よりも随分と音は小さくはなっていますが、やはり城壁の向こうからはドン、ドンという不規則な破砕音が聞こえてきます。

誰かが戦っているのかしら。勇者？ 冒険者？ それともまだ見ぬ悪党の方々？

「……もしそうであったとしても、それが強敵であった場合、今の私では力不足ですものね」

先生に出会えて浮かれている場合ではありません。

ここに来た目的。力を取り戻すことを最優先に動きましょう。

「たとえ殴り甲斐のありそうなお肉が通るかかっても、見ているだけだなんて。悔やんでも悔やみきれませんもの」

ベルフェゴールさん案内の下、私は再び中庭から城内の廊下に戻りました。

そこには来た時と同じように廊下が延々と続いておりましたが、今度は正解のドアの前に先生の使い魔である蝙蝠^{こうもり}が止まっていたため、迷うことなく別の場所に繋がる廊下に移動することができました。それから十分程が経ち、いくつかの廊下とドアを超えた私達は、やがてとある部屋の前に辿り着きます。

「このドア……いえ、もう気のせいではありませんね」

どこかで見覚えのある、年季が入った上等な木製のドアをゆつくりと開きます。

するとそこに広がっていたのは――

「――やっぱり。もう、先生ったら」

埃一つない綺麗な白い床のタイル。部屋の中央に置かれた勉強机の木のテーブル。天井には屋内に光が差すように作られた、ガラス張りの屋根。

陽光が差し込まないため、部屋の壁に掛けられたいくつものランタンが代わりの光源になっているものの、それは私が幼少期にグラハール先生に教えを受けていた、ヴァンディミオン邸の勉強部屋そのものでした。

「お待ちしておりました」

テーブルの対面には執事服を着たグラハール先生が立っています。

ああ、なんと懐かしいのでしょうか。私が十歳になる頃に、老朽化が原因で建て替えてしまつて、今はもう記憶の中にしか存在しない勉強部屋。

ここにいとまるで先生に家庭教師をして頂いていた、幼少期に戻ったかのようなのですわ。

「中庭の庭園を見た時に、ヴァンディミオン邸の庭とそっくりでしたのでまさかと思いましたわが……ふふっ」

言葉の途中で思わず笑みがこぼれてしまいました。

先生つたら、私とお話するためにわざわざ当時の思い出を再現してくれたのですね。

こういうのを粋な計らい、というのでしょうかね。

「お席にどうぞ、スカーレットお嬢様」

「はい。それではお言葉に甘えさせて頂きますわ」

促されるまま席につきます。

すると部屋の奥からベルフェゴールさんが現れて、手に持っていたティーセットをテーブルに並べ始めました。そして私の前に置いたカップに、ゆつくりと丁寧な所作で紅茶を注ぎます。

「ありがとうございます、ベルフェゴールさん」

カモミールの紅茶。

これも幼少期に先生が、勉強や運動で疲れた私をねぎらうために、よく出してくれた物でしたね。「懐かしい……先生に様々な知識を教えて頂いたあの懐かしき日々が、まるで昨日のことのように思い浮かびますわ」

口をつけたティーカップをテーブルに置き、ほうと吐息を漏らします。

対面の席に座った先生は私を見つめながら、目を細めて穏やかな声で言いました。

「本当に……ここまでよく頑張りましたね」

「先生……」

その言葉に私は、今までしてきた苦勞がすべて報われた気がして。

心の中のモヤモヤが、ゆっくりと晴れていくのを感じました。

他の誰に同じ言葉を言われても、こんな気持ちになることはないでしょう。

「貴女の活躍は度々耳にしておりました。時には邪悪な女神の使徒の企みを打ち砕き、時には世界の脅威にもなり得る邪竜^{じやりゆう}を叩きのめし……やはり貴女は私が見込んだ通り、自らが持った力を世のため人のために振るうことができる、高貴なる人間でした」

目を閉じ胸に手を当てて、先生の温かいお言葉をたっぷりと胸に染み込ませた後。

私は目を開き、もう一度先生に会えたら必ず言おうと思っていた言葉を口にしました。

「……覚えておりますか、先生。私が幼少期になぜ人を殴ってはいけないのかと、お聞きした時のことを」

「ええ、よく覚えています。それに対して、私が人を殴るのは良くないことだからと答えた時の貴女の反応も」

フツと、先生が口元を緩めます。

「普段感情をあまり表に出さない貴女が、あんなにも落胆したところを見たのは、あれが最初で最後でしたから」

「お恥ずかしいですわ。まだ子供でしたから」

コホンと咳ばらいをします。もう、先生つたら。意地悪ですのね。

「その後、先生は改めて私に答えて下さいましたね。なぜ人を殴ってはいけないのかを」

先生は一週間の授業を終えると惜しむ私に別れを告げて、ヴァンディミオン邸から去って行きました。

その翌日、領地の街でお買い物をしている時に、子供が人さらにさらわれたという話を聞いた私は、単身で悪党のねぐらに乗り込みます。

最初こそこちらを子供だと侮る悪党達を殴る蹴るして大暴れしていた私でしたが、途中で子供を人質に取られてしまい絶体絶命の危機に陥ってしまいました。

そこに先日去って行ったはずのグラハール先生が颯爽^{さつそう}と助けに現れて、こう言ったのです。

「『誰かを殴れば自分の拳も痛む。人を傷つけ自らも傷つく。それはとても虚しいことです。なので誰かを殴る時は——』」

先生はいつも手に持っていたスーツケースをおもむろに開けると、中から鉗^{くわ}付^びきの皮の手袋を取り出して手に装着し、高らかに宣言しました。

「『こういつた手袋を着けて、自分が傷つかずに気持ちよく、豚野郎をブン殴れるようにしなければなりません』と」

次の瞬間、先生は圧倒的な暴力で悪党を完膚^{かんぷ}なきまでに、ボコボコにブチのめします。

そんな先生のお姿に幼かった私は、目を輝かせずにはいられませんでした。

そして誰にも理解されなかった、私の誰かを殴りたいという歪んだ欲求を受け止めてくれて。

さらに私が進むべき道を、自らの背中と拳で示してくれた先生のお姿に、深い尊敬の念を抱いた